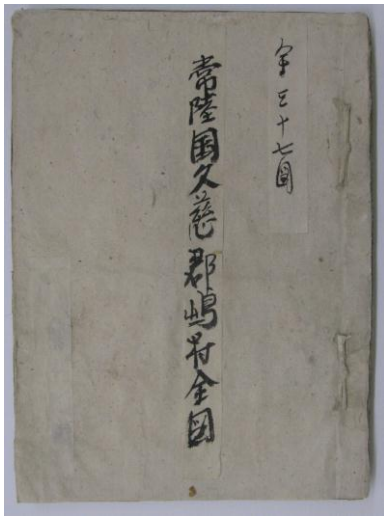


資料紹介 常陸国久慈郡嶋村全図



表紙



嶋村全体図

この資料は弘化2年（1845）10月に作成された、久慈郡嶋村（常陸太田市島町）の絵図である。一舗の絵図ではなく、豎帳の和本（37帳）に嶋村全体と各小字ごとの田畑、屋敷、山林などが描かれる。

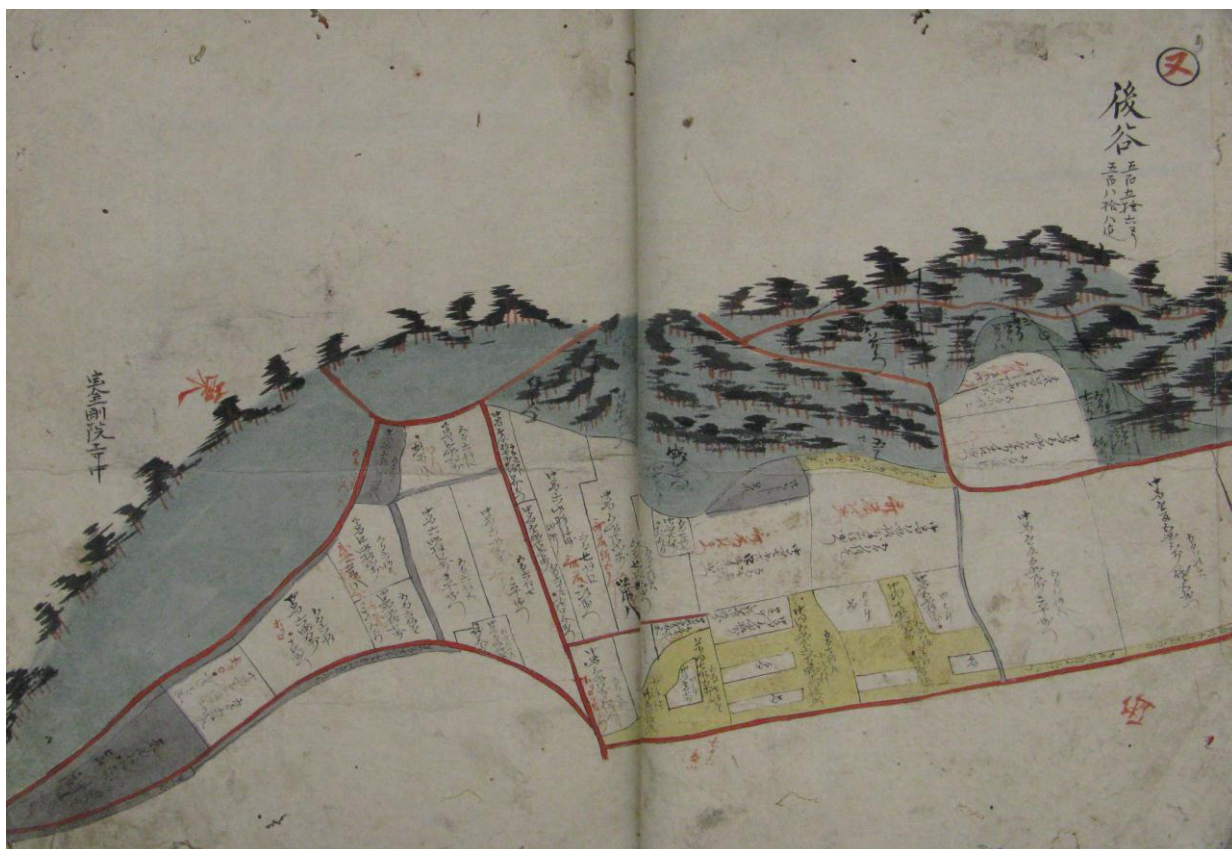
本来的には、この資料は水戸藩の藩政・農政に関する資料としてみるのであるが、今回は少し視点をかえて、この絵図に描かれた古墳について紹介したい。

常陸太田市島町は久慈川・山田川の合流地点に独立丘陵として立地しており、古墳時代には巨大な梵天山古墳（大きさが茨城県第2位の前方後円墳）が築かれた。それを中心に他に13基の円墳が分布し、さらに西側の崖面には「百穴」と称する横穴墓約30基（現在の開口基数）がうがたれる。これらの古墳・横穴墓から形成されるのが梵天山古墳群であり、島町の景観にひとつの特徴を与えている。

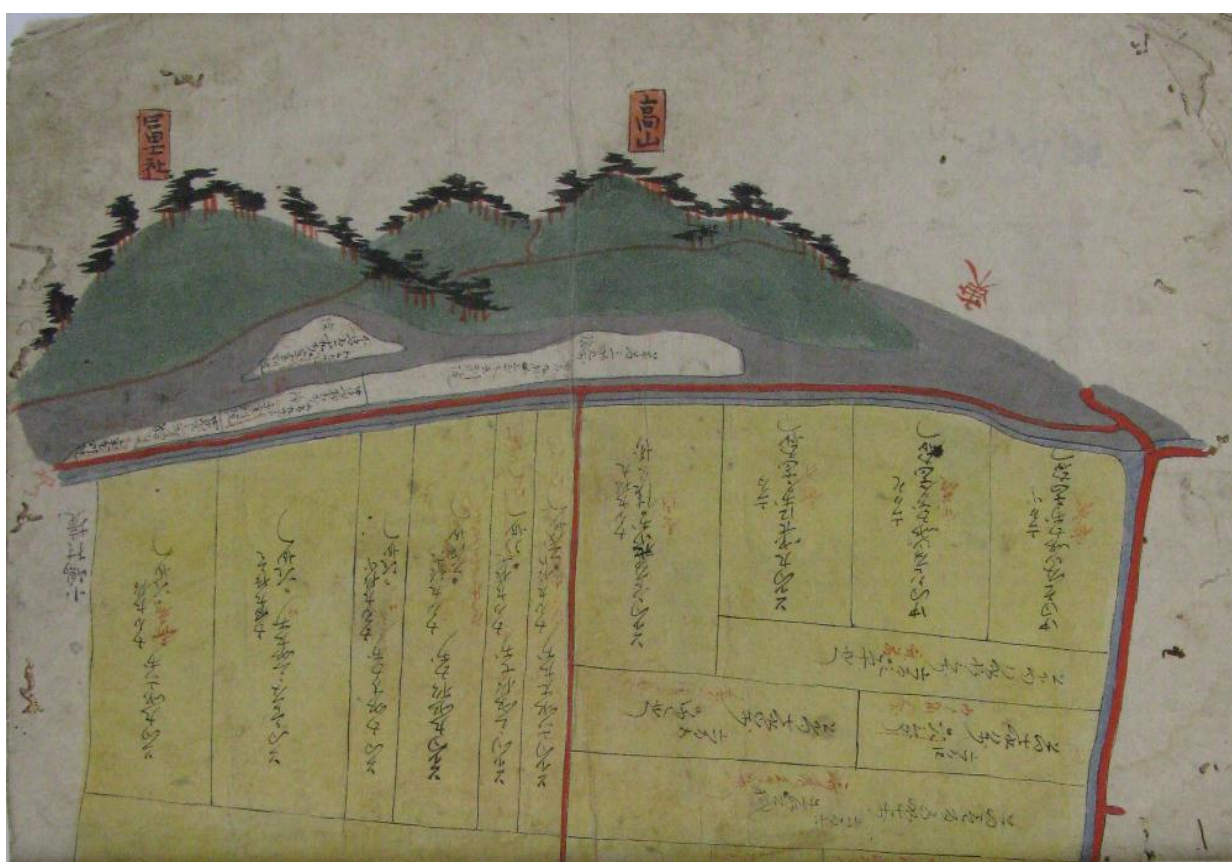
本絵図中の註記にも「梵天山」古墳、「高山」塚古墳、「富士社」（富士山塚）古墳、そして「百穴」など横穴墓も含む古墳の名称の記載がある。いずれも、それらの名称が今日にも伝わる。こうした点から、私たちが、古墳に～塚古墳、～山古墳と名称をつけてよんでいること、その起源が少なくとも近世末期にまで遡れる可能性があるといえよう。

それにしても、近世の人びとが、こうした古墳に対して、自然地形の山ではなく、人工的な構造物としての塚（墓）とみなしていた点は興味深い。たしかに、弘化よりも遡った時代に、たとえば徳川光圀が、上侍塚古墳・下侍塚古墳（栃木県大田原市）を発掘したような事例はあるが、大半の人びとは専門に歴史学を学んだわけではなく、ましてや西洋を起源とする近代的な考古学など、その存在さえ知るよしもない。おそらく、地域の人びとが、先祖より「この塚（山）は～墓だ。大切にせよ」という教えが代々伝わってきたと思われる。その出発点を古墳時代にまで遡らせられるかは別としても、数百年の間、村の記憶となり、それゆえ村における「聖地」として大切にされてきたのであろう。

近世村絵図は近世史研究の第一級の資料であるが、少し見方を変えれば、古代史や地域伝承についても、意外な答えを秘めているのである。



描かれた梵天山古墳



描かれた富士山塚古墳（左）と高山塚古墳（右）

学芸課 飛田英世